



オアシス

第 29 号
令和 3 年
12.1

自ら考え行動できるように
そんな見守り方って難しいけど…



特集

保護者のこえ



今回のオアシスは新型コロナウイルスの影響で、予定されていた事業の開催が多く見送られたため、皆様からのメッセージを中心に掲載しています。こんな時だからこそ伝えたい言葉を、青少年をはじめ彼らを取り巻く皆様へ、その思いを届けたいと思います。

このメッセージが子育てのヒントやエール、共感そして子ども達自身への示唆として、少しでも多くの方々のお役に立てば幸いです。

(今回の特集記事は投稿者の意思を尊重し、可能な限り原文のまま掲載しています)

今の子どもの問題点、そして大人の課題はなにがあるでしょうか
保護者の中にはこんな意見もあります

【子どもの問題点】

- ・自分の思いをうまく伝えることができない
- ・大人からの指示待ちになっている
- ・成功体験が少ない

最初から最後まで自分で考えて行動する
機会が減っている？



大人は子どもに指示するのではなく
見守りやアドバイスが必要

【大人(保護者や地域の方)の課題】

- ・事故や事件の発生を気にしすぎて子どもの行動を制限しすぎていないか



大人は、事故や事件が発生しないような環境を整えるべきだが
子どもの行動を制限し過ぎないようにする。

- ・子どもが意思決定する前に大人が全てを決めてしまっていないか



大人の理想や正しいと思うことを子どもに押し付けず、まずは自由に考えさせ、子どもの「考える力」を育てることが大事である。子どものとった行動が間違っていることであれば指摘したり一緒に考えるのが大人の役割ではないだろうか。

- ・必要以上に心配したり、関わり過ぎたりしていないか



子どもを心配する気持ちは理解できるし関わることも必要だが、行き過ぎた心配や干渉しすぎることが、子どもの自由を奪うことにつながる。





子育てを通して

長男、二男とも大学生になった。
子育て期を過ぎ、巣立ちの時が近づいてきた今
子どもを通して経験した日々を振りかえりたい
と思う。

子どもの成長とともに、幼稚園、学校、スポーツ
少年団など、他の子ども、その親、教師など他者との
関わりが増えた。

「元気に、自分らしく育てほしい」という最初の
思いも、勉強、運動、性格、体型など、他の子どもと
比較「うちの子は…」と一喜一憂することが増えた。

子どもが出ず結果が良かったときは喜び、悪かった
ときは残念がる。そんな対応が当たり前になった。

「良い結果を出せば親は喜び、悪い結果は失望
させる」

そんな刷り込みを子どもに植え付けていたこと
を反省とともに深く後悔している。

子どもの自己肯定感、身近な親の言葉かけ
態度から育まれていくものだと思う。

「自分はこのままでいいんだ。ここにいていいんだ」
という安心感が家庭の外に向かうときの自信に
つながる。

自分を信じる事が出来る人は強い。

その根本にある自己肯定感を親として子どもに
与えられなかったのではないかと。苦々しい思いが
胸に残る。

こう思うようになったのもつい最近のこと。

二男が進学で家を出て、生活のリズムと気持ち
に余裕が生まれてきたからだ。

不十分な親だったかもしれないが、懸命に過ご
した日々だった。

うまく力を抜くことの出来ない、不器用な性分の
私は余裕をもつことが出来なかった。

今思うのは、この余裕というのは何も恵まれた
人だけが持つものではないということだ。

少々飛躍するかもしれないが、余裕は自信と同
義だと思う。私自身、自己肯定感が低い方だと自覚
している。

子どもの結果に一喜一憂していたのは、それが
自分にとっての付加価値になっていたからだと思う。

「子どもは子ども、自分は自分」

その切り離しが出来ていなかったし、それは今も
そうなのかもしれない。

子どもを持ちながら、いまだ未熟な私であるが
自分の姿を俯瞰し、自分の気持ちと向き合い、対話
することで、自分に対する自信、自己肯定感を高め
ていきたいと思っている。そしてそれは必ず達せら
れるものと信じている。

ありのままを認める。

自分にそれが出来てはじめて、他者にできる。

私が自分を認めることから始める、子育て。

冒頭に子どもが巣立ちのときを迎えていると
書いたが、私にとって、本当の子育て、個育ては
今から始まるのだと思う。

何もあれこれと世話を焼くのではなく、子どもを
認めること。

その子、その子のペースを受け入れること。

過ちの多い親だったと思うが、子ども達がそれに
気づかせ、私に自分を教えてくれたと思う。

自分らしく生きてほしい。

子どもの人生、最初に願った思い。

それは今、私にとっての願いにもなった。

これからどんな人生が私に、子どもに訪れるの
だろう。

今はおそれより、わくわくの方が大きい。



保護者の疑問



現在の学校運営は、私が小学生の頃からかなり変わり、親になった今は疑問を感じることもあります。

その一つは、登下校の荷物の多さです。娘が入学した年の保護者間の話では、ランドセル重量が8キロと聞いています。子どもの頃、重かった記憶はありますが、その数字を聞くとやはり重すぎるのでは？と思います。現在は、学校に教科書を置いて帰ることも出来るように対策しているとのことですが、重いことだけが問題ではない気がします。

二つ目は、宿題の丸つけです。私は、先生の丸つけがとても嬉しかった記憶があります。

それは、花丸と先生が英語で書く言葉が、頑張ったら頑張った分増えていくからです。当時の私は、言葉の多いことが頑張りの勲章として、友達と見せあいつこしていました。ところが、保護者が行うということになると、現在多くの家庭環境は、共働き・一人親家庭・核家族、世の親は仕事から帰ってから炊事や習い事の送迎と忙しく、なかなか宿題を見てあげることも難しいのが現状です。そもそも、丸つけ作業を家庭でする意味は何でしょう？保護者の中には「怠慢では？」と言われる方もいます。私自身、「先生の仕事じゃないの？」と子どもに何度も言いました。保護者のどれだけの人が、その理由を知っているのでしょうか。実際のところ私も分かりません。その疑問を解消しない限り、不満は増えるばかりではないでしょうか。

三つ目に、勉強を教えることが出来ないことです。親が学校で教わった勉強方法で教えようとしても、子どもが教わっている勉強方法ではないので、子どもは「そのやり方は先生と違うからダメ」と困惑し言います。保護者も、今現在教わっている内容を知っていても解き方や方法を知らない限り教えようがなくなってしまいます。

学校と家庭との、情報の共有は必須ですが、少し前に理不尽な苦情を言う「クレーマー」という言葉を耳にすることが増え、学校に対する問合せが苦情と思われるのではないかと不安で、疑問を言うことに「言っているのか」と言えずにいるのが現状です。



勇気をもって書いていただきました。

素朴な疑問や施策の意義についての保護者の思いには、やはりコミュニケーションを通して理解してもらうことをためらわないことなのでしょう。思い切って先生にご相談されてみるのもいいと思いますよ。(編集委員)

子どもを見守る大人たち



私の子ども達は、自分の母校に通っています。私の母校は田舎ということもあり生徒数が多くはありませんでした。今は、いっそう少子化が進み在校生の数で言えば半分程度になってしまっています。しかし、当時から生徒数が多くなかったためか、先生方からの指導がとても行き届いたものだったのではと、今になって思えます。学力に関してもですが、クラスの問題や地域行事のかかわり方など先生と一緒に考えていたものです。

時代が変わった今も先生方の教育は、子ども達の自主性や意欲といったものを意識しているのではと好感が持てる部分が見えます。ただ、先生方も激務の中、また多様化した子どもの環境など一人ひとりまでは注意が向けられないのではと思っています。そうした中で大切なのは、学校、家庭、地域での協力体制が必要だと私は思っています。

過去に、保護者の方と雑談したときに出てきた会話がありました。私の地域では、ボランティアの方が善意で子ども達の登校を見守ってくれています。交通量の多い道路の横断、細い道での一列登校などの指導、時間のない我が家にとってはとてもありがたく思っていました。そんな折ある保護者が「この前うちの子どもが登校中に〇〇さんからやかましく怒られたって言いよった。うちの子どもが元気がありすぎて言うこと聞かんから目の敵にしるとよ」とのことでした。私は聞いてすぐに、当然のことではと思いました。車が走る道路、少し間違えれば大事故につながります。また子ども達は、私たち大人の予期しないことをしたりもします。

ボランティアの方は以前から知っており、一人の子を蔑む、大声で叱責されるような方ではありません。後日お話しした際に、危険なので列を乱さないように注意したところ聞いてくれなかったので大きな声が出たとのことでした。おそらく前述の保護者もきちんと説明を受けていれば納得できたのではと思いますが新型コロナの影響もあり機会がなく終わってしまっています。

このように人の受け止めかたは双方の立場により変わってくるものなのだなと思った出来事でした。私も今年度から、保護者活動の運営をお手伝いさせていただいています。これらのことを肝に銘じて活動を行わなければと深く思いました。今の環境では、会議なども行いづらく十分な説明も行えていないのが現状です。それでも受け止める側が納得しやすいような運営を心掛けていこうと思います。





非認知能力EQ

「〇〇君は1塁で1番、〇〇君は3塁で2番・〇〇ちゃんはピッチャーで9番」守備位置と打順が決まると早速、相手チームとの試合が始まる。当時、幼かった私だが一人前のピッチャーとしてチームに入らないと9人が揃わず、試合が成立しないのである。

放課後や日曜日、夏休みともなると中学生から小学校低学年までのメンバーで、近所の相手チームとソフトの試合をしては楽しく遊んでいた。夏の甲子園での高校野球の熱戦を見るたびに、昭和40年代の頃の夏休みのこの光景が思い出される。当時はこのような光景が学校の運動場、空き地果ては田んぼでもよく見られたものである。この遊びの中で、私たちは自然に集団自治、自発性協力、解決力、耐性、コミュニケーション力といったものを身に付けていた。

現在、こういった光景を目にすることは殆どない。子どもを取り巻く社会環境、生活環境が大きく変わり、これらが複雑に絡み合っ^{ほとん}て子ども達は遊べなくなっているのだろう。そしてこれらのことがさまざまな子どもの成長を阻害しているのではないかと考える。

2000年にノーベル賞を受賞した経済学者ジェームズ・ヘックマン氏は、幼児教育に関して幼児教育を実施するグループと何もしないグループに分け、その後40年間追跡調査を行うという大規模な研究を行っている。

この研究結果から彼は幼児期から「非認知能力」を身に付けさせることが重要であると結論づけている。この、非認知能力（EQ）とは、心の知能指数とも呼ばれ、集中力や意欲、困難に負けまいとする忍耐力や回復力、約束事を守る自制心や制御力、コミュニケーション力等の数値では測れない能力のことである。

「知能指数（IQ）」が点数化することができる能力に対し、「非認知能力（EQ）」は測ることが困難でどれだけ身についたかわかりにくい。そのため、見落とされがちなのであるがこれこそが、後に子どもの生活を豊かにする能力だというのである。人が人として社会に出て生きて働く上で重要な能力だと考えられている。

今後、私たちは、家庭教育を含めてさまざまな体験を通して、子どものこの非認知能力をどう伸ばしていくかが問われている。このようにして育まれた非認知能力は、子どもの可能性を無限に広げていくのである。

今年も、秋の訪れとともに夏の風物詩ともいえる甲子園球場での熱い戦いが終わった。色褪せない思い出とともに私の非認知能力もあの遊びの中で醸成されたのだろうか。

限られた紙面の中でご紹介できるメッセージはわずかですが、きっと保護者の数だけ伝えたいことはあると思います。普段は中々目にする事の少ない内容とか、大変貴重なメッセージを受け取りました。そして、立場が違えばまた異なった考え方も当然出てきます。

そうした考えを受け止めながら理解を深め、子ども達の健やかな成長につながるヒントを見つけていく努力を今後も続けていきたいと思っています。

地区協議会

HOT LINE

十文字中学校区 「三奈木スポーツ少年団 入団式」

～ 一層の活躍を誓う ～

三奈木スポーツ少年団入団式が4月22日三奈木コミュニティセンターで開催されました。多くの保護者や地域の役員が見守る中剣道、ソフトボール、サッカーなどのクラブ団員が参加しました。

入団式では「スポーツ少年団誓いのことば」を全員で力強く読み上げ各クラブの代表者が本年度の抱負発表で、どのクラブも「上位を目指し練習に励む」と発表しました。



主催者の立花 宏スポーツ少年団団長からは「スポーツは競技ですから勝ち負けの世界です。しかし、単なる成績主義ではなく、挨拶や礼儀を大切にし、親への感謝や相手への思いやりといったことを学んでもらいスポーツを大いに楽しんでください」と挨拶がありました。

青少年育成協議会では、三奈木スポーツ少年団の本年度なお一層の活躍を期待しています。

“地域を挙げて 応援していきます”

秋月中学校区 「秋月小学校 海山交流」

海山交流は平成16年から秋月小学校と福岡市立北崎小学校との間で始まりました。海辺の小学校と山間部の小学校の2校の交流を通して自分たちの住んでいる地域のよさを見直したり、児童のふれあい活動を推進することが目的で始められた取組です。それ以来、毎年行われる夏の伝統行事となっています。しかし、昨年度は新型コロナの関係で実施ができませんでしたので、子ども達にとっても今年の開催が本当に待ちに待った行事となりました。



6年生は、北崎小の6年生児童を秋月に招待して、「紙すき体験・葛餅試食・秋月博物館見学」など、秋月ならではの文化に触れる体験を行うことができました。また、5年生児童は北崎小に招待され、「海釣り・シュノーケリング体験」など、海ならではの活動を満喫することができました。子ども達はわずかな時間ですぐに打ち解けることができ楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。

この出会いを、子ども達の小学校時代の思い出の一つとして大切にしてほしいと思います。

朝倉市青少年育成市民会議では賛助会員を募集しています。

—未来の朝倉市を担う子ども達をあなたの手で—

朝倉市青少年育成市民会議では、活動を財政面でサポートしていただく賛助会員を募集しています。

朝倉市の子ども達をいきいきと健やかに育てるための活動にご参加ください。

それぞれの立場で、得意の分野で、さまざまな形で子ども達を見つめ、支えてください。

入会の手続き

会費の納入によって、自動的に会員名簿に登録されます。いずれかの口座に納入いただくか市民会議事務局に直接ご持参ください。

【銀行振込みの場合】

朝倉市青少年育成市民会議
筑前あさくら農業協同組合 甘木中央支店
普通預金口座番号 5321182

ご協力いただく会費の年額

| | | |
|------------|-----|----------|
| 賛助会員（個人） | 1 □ | 1,000 円 |
| 賛助会員（団体） | 1 □ | 3,000 円 |
| 賛助会員（法人） | 1 □ | 10,000 円 |
| 特別賛助会員（法人） | 1 □ | 50,000 円 |

団体・法人の賛助会員には市民会議日より「オアシス」をお届けします。また市民会議の活動の折に触れ、賛助会員であることの周知を行うとともに、県民会議の顕彰に推薦されることがあります。

ご不明な点などありましたら、下記事務局までお問い合わせ下さい。
(e-mail でも可能です)
danjo@city.asakura.lg.jp



●ありがとうございました● (賛助会員、敬称略、順不同)

【個人】別府 稲子、梶原 真
(令和3年1月1日～令和3年10月31日時点)

おすすめ
の
一冊

「きけ わだつみのこえ」 日本戦没学生の手記

編集：日本戦没学生記念会 発行：岩波書店

戦争の体験を持たない世代が、大多数を占める現在に戦争の記憶を伝え、戦争の愚かさを伝える一冊です。

出撃命令の元、死に直面するぎりぎりの中で自分の生の意味、命を懸け守るべき家族・日本についての葛藤などを思うと自分の生について考え生きているか自分に問いかけたくなります。



戦時中の10代、20代の学生たちが何を思い、考え、戦地に向かったのか。学生たちが自分の命をかけた家族に思いを綴った手記は、平和を改めて考えさせられます。

編集後記

今回はコロナ禍の中、「こんな時こそ伝えたい」という保護者からのメッセージなどを中心に特集を組みました。

昨年からの新型コロナウイルス感染拡大により、子ども達を取り巻く環境は大きく変わっています。コロナ感染防止のため、常にマスクの着用が求められ、給食は黙って食べる「黙食」。感染リスクの高い授業や部活動は制限され、文化祭や運動会、修学旅行などの行事も中止や規模縮小となったり、友達と遊ぶことさえままならない状況になったりと、子ども達も気づかない間にストレスを溜め込むことになってきているのではないのでしょうか。

大人にとっても多くの不安とストレスを感じているこのコロナ禍において、子ども達の健全な成長を図るためには、大人がどのように子ども達と接していけばいいのか。また、学校や家庭だけでなく地域と子ども達との関わり方などについても、改めて考えていく必要があるのではないかと思っています。

本号の特集におけるメッセージが、子ども達との接し方などを考えられる際の参考になればと願っています。



穴あけが必要な場合は△を中心に開けください。